

## 4. 結果の考察

本報の目的は向上訓練における対話的スタイルの授業展開を具体的に描写することである。どのように対話的な向上訓練、一方的な教え込みでない向上訓練を行えばよいのかを検討することである。この章では、Freire、Bollnowの対話的教育に関する見解などを参考にして、本研究の授業分析の結果を二つの視点から考察する。

- (1) 対話的向上訓練がもつべき基本的な要件は何か。
- (2) 教える側の一方的な教え込み方式の対極にあるものは何か。

### 4-1 対話的向上訓練の授業がもつ基本的要件

本研究の授業分析結果からみて、次のごとき4つの要件があげられる。この4つの要件は対話的な授業を構造的に表現しようとするものではなく、現段階では単に列挙するのみである。

第1に、対話的な授業では指導陣の一方的な説明ではなく、指導陣と受講者、あるいは受講者と受講者との間に、話のやりとりがあることである。

その授業が“真の対話”となっているかどうかは別問題として、話すという活動の形式からみて指導陣と受講者とが交互に話している状態があることである。<sup>12)</sup>

Bollnow は話すという活動を“独話的な形式 (monologische)と“対話的な形式” (dialogische) とに分けている。

前者は「話すという活動が一方的に方向づけられた形式。／一方が他方に話しかけるがその場合、語りかけられた人の言語による回答は必要でない。／一方だけが話者であり、他は聴いて理解するという役割を与えられる話しかたである。それに対して対話的な形式は「交互的に方向づけられた形式。／やりとりされる談話の交互性こそ重要なのである。／多数の人が交互的に役割において同等の権利を割りあてられているような話しかた。」

と述べている。

このように対話では話の交互性が要件となる。この研究の結果は〔3-1〕に述べたごとく指導陣と受講者との間に話の交互性がみられる。

第2に、対話の授業においては指導陣からの「問」、あるいは「テーマ」といったものが立っていることが要件となる。

対話的な授業では指導陣からの「問」が受講者へと出され、受講者はそれに応じている。

向上訓練の授業の場合、「問」あるいは「テーマ」は生産現場で受講者自身が直接経験している、具体的な事柄がとりあげられる。

この授業においては、第3日目の前段での授業において、この対話、討論での「問」、「テーマ」をあらかじめ準備している。

例えば、ある受講者が行った、加工手順の工夫に着目して、“なぜ、そのような手順にした方がよいのか、理論的根拠に話を広げる準備をしてこの授業に臨んでいるのである。

このようにあらかじめ共同のテーマを提示準備するのであるが、なおかつ授業の中で対話をしてあらためて受講者と指導陣との共通のテーマをつくり出していっている。

第3に、授業における対話は「問」、「テーマ」が構造的に準備されていて、それらの「問」が連鎖的に指導陣から出される。その「問」、「テーマ」は固定的、完結したものでは対話は発展しない。

つまり、あまりにも当然で疑いようのない主張という形をとるならば、そのまま、すぐに理解され、それで対話はとぎれてしまう。

対話の授業としてとりあげられる「問」、「テーマ」はある種の非完結性をもつことがひとつの要件である。

この点について、Bollnow は次のように言う。

「ある意見が何か固定的な、完結したものとして提出され、すでに言語上だけからも、当然で起りようのない主張という形をとるならば、そのまま、まっすぐ理解され聞きとれるところまできて、それで対話はおしまい

になる。」

第4に、対話の授業では指導陣から、そのテーマに関する結論を最終段階にもってくるのは当然の要件である。指導陣は受講者に問いかけて、受講者の意見、発言を根気よく聴いて、その対話の最終部で指導陣の見解を述べることになる。

つまり、対話を通して受講者が自ら自覚するように授業をもっていくことになる。この意味ではプラトンの「饗宴」での対話過程と類似点がある。<sup>13)</sup>

向上訓練における対話的な授業では、少なくとも、このような要件をそなえていることがのぞまれよう。

#### 4-2 “一方的な教え込み”方式の対極にあるもの

この研究の目的は向上訓練における授業で一方的な教え込みをいかにして脱するかについて一つの論点がある。成人在職者を対象とする向上訓練でこの点の検討は極めて重要と思われる。そして“一方的な教え込み”の対極に“対話的”な授業をおいてみてきた。

この章では、“教える側の一方的な教え込み”方式の対極におかれるものについて吟味しよう。

まず、“教え込み”と“教え込みでない”はFreireのいう、伝達の教育（銀行型教育）と対話的教育（課題提起教育）におきかえてみる事ができる。<sup>14)</sup> これは極く、日常的な表現におきかえると次のようなニュアンスを含んでいる。

つまり、伝達の教育は“教師が詰めこむ内容を生徒が単純にそして従順に受けとる”“教えられることを暗記する”“生徒の頭にたたきこんでやらなければならない”といったものである。これに対して、対話的教育は“押しつけない”“操縦しない”“自ら選択して決定を行う”“批判的に感じとる”“自ら悟る”といった表現があてはまる。

また、教育学的な用語からみれば、注入教授 (indoctrination) に対して、開発教授 (heuristic mode of teaching) が 対置できるのである。<sup>15)</sup>

このようにみると、“一方的に教え込む”方式の対極におかれる教授方法は少なくとも教師が何もしないことを意味しているわけではない。そして、対極におかれる教授方法は一様ではなく、教える側が学習場面を「仕組む」ことが必要になっている。この教師の側で学習場面の「仕組み」方はいろいろと考えられている。

ここでは、これらの事例をいくつかあげてみよう。

(1) Andragogy 的なアプローチでの“発見学習的な方法” (discovery learning) がある。

これは Margolis によれば、次のような特徴がある。<sup>16)</sup>

- a) 職務に関連する事例や問題を取りあげて分析と意思決定の技能を重視する。
- b) 学習者が知識を適切に習得できるように構成された一連の活動に入れる。“教えこむ” (teaching approach) よりも“学びとる” (learning approach) に力点をおく。
- c) 自分の仕事にとってこの教育計画がどのような意味があるのか、常に自覚できるようにする。

このように“学びとる”方式に力点をおいている。

(2) 「相互啓発による自己開発型研修」にみる“一方的教え込み”から脱皮である。<sup>17), 18)</sup>

これは川島章氏、井田一郎氏によって提唱されているもので、教育環境を指導側が仕組む中で受講するメンバー同士の相互啓発と指導陣の補助指導を行なうものである。

この考え方では「従来型訓練の特徴は“教える→教わる”という関係が前提になっている。それは①教える者がもっている知識や技能を教わる者に伝授する過程が教えることである。②会得した知識や技能を社

会的にいかにか適用するか応用するかは学習者自身の状況対応力の問題である、との考えのうえに立っている。」

その従来型訓練の対極にある「相互啓発による自己開発型研修」では指導する側と学習する側の活動をつぎのようにとらえている。

指導する側	学習する側
(1) グループを構成する	
(2) 目標・問題・テーマなどを与える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 思い出す</li> <li>・ 理由（原因）を考える</li> <li>・ 方法を考える</li> </ul>
(3) 意欲を喚起させる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 具体的な目標を立てる</li> <li>・ 目標達成の計画を立てる</li> <li>・ 自ら学ぶ方法を考える</li> </ul>
(4) 相互啓発を促進する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 意見を交換する</li> <li>・ 挑戦する</li> <li>・ 実際に体験する</li> <li>・ 情報（書物・資料など）を求める</li> </ul>
(5) 学習の援助をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学び方に気づく</li> <li>・ 良い点・悪い点を発見する</li> <li>・ 正しい方法を発見する</li> <li>・ 原理原則を発見する</li> </ul>
(6) 成功体験を味わわせる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 成果を確認する</li> <li>・ 達成感・充実感を味わう</li> <li>・ やればできるとの自信を得る</li> </ul>

ここでは、学習者が“気づく”“発見する”ということが強調されている。

- (3) 学習者にふさわしい課題を提供し、それを突破するための手段を用意しておいて、そこで学習者に悟ってもらう方式である。<sup>19)</sup>

これは能力開発工学センターの提唱する方式である。

技能、操作の伝習から、どのような方向への転換を指摘しているのであろうか。

例えば、コンピュータ技術に対する取組み方として次のような説明がされている。

「コンピュータを捉えるというのは、ある特定のシステムの知識、操作を覚えるのではなく、そのシステムにおけるコンピュータの役割を捉え、様々なシステムにおけるコンピュータの位置づけが自ら考えられて、そのシステムに対するアプローチの仕方が生み出されてくるということになる。」

「具体的方法を伴った物を調べる姿勢、アプローチの姿勢を身につけるには、これまでの教育の形でよく見られる教師が生徒に知識、技術、技能、操作を与える方法では身につかないのである。～、そうした追求する姿勢、態度は与えられるものではなく、追求する行動によってはじめて身についていくのである。追求してみなければ追求の仕方は身につかないわけである。自ら悟ってはじめて自分のものとなるのである。」

このように述べている。要するに、学習者が自ら考え、自ら悟れるように学習環境を「仕組み」しておくわけである。

以上のように“教える側が一方向的に教え込む”方式の対極にはいくつかの方式がありうる。これらには共通的な要素があるように思われるが、現段階ではその考察はさけておきたい。